

目的 戦後，我が国では食生活の欧米化が著しく，疾病構造もこの数十年間に欧米型へと変化してきている．一方，国民栄養調査からは動物性食品（特に卵類，肉類）の摂取量が増加していることが明らかである．それに伴い，動脈硬化性疾患との関連が強いとされているコレステロールの摂取量も，急速に増加してきた．今回は成人病による死亡率とコレステロールの摂取量との相関関係や摂取食物と疾病の経時的な影響をみる指標として時差相関係数を各種統計資料より求め若干の知見が得られたので報告する．

方法 国民栄養調査食品群別表をもとに，食品荷重平均群別表を作成した．この表をもとに科学技術庁資源調査会の日本食品脂溶性成分表（1989）から，昭和22年～62年の41年間の食品群別のコレステロール含量表を作成した．いわゆる成人病の死亡率は昭和22年～62年の厚生省大臣官房統計情報部の人口動態統計を用いた．統計処理はLotus 1-2-3及びStat Flexにより行ない相関係数および時差相関係数など相互相関分析を行なった．

結果 平均1人1日当たりのコレステロール摂取量は昭和30年代半ばに約200mgであったがその後急速に上昇した．昭和40年代に300mgを越し，以降現在では330mg前後を推移している．これは，特に卵類摂取量の増加によるものと考えられる．成人病死亡率とコレステロール摂取量との相関については，糖尿病死が特に高い．時差解析によると，1～5年前のコレステロール摂取量と糖尿病死の相関が高く，心疾患，乳がん，結腸がんとの相関は移動年数が増すほど相関度が高まった．また，訂正死亡率で解析すると心疾患は負の相関を示した．